

森の移り変わり

私たちの周りには、いろいろな森がみられます。これらの森は、草や木が長い間太陽の光を求めて競い合いながら成長してきたものです。明るい所を好む木(陽樹)や、日影でも育つ木(陰樹)などの特徴を持った木が混ざって森をつくっています。ここでは森が移り変わっていく様子を説明します。



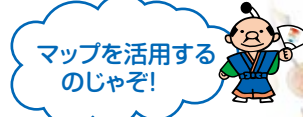
環境に順応してゆく森の木々、森の中できっといくつものドラマがあることでしょう。そんな森の中に一歩足を踏み入れてみれば木々の営みを感じられるでしょう。

～ 水と緑の都・松江 ～

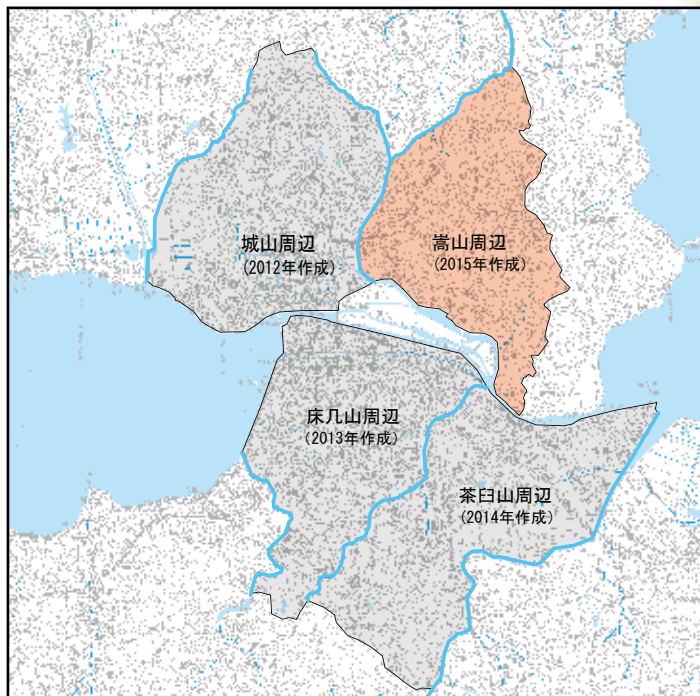
水と緑の都「松江」の市街を主要河川と山地によって大きく4つに分け樹木を紹介していくシリーズ最終編です。これまで「市民の皆さんに松江の豊かな自然を身近に感じてほしい」という願いをもって、樹木観察会やハイキング、植物画教室などを企画してきました。最終回の表紙の植物画は、松江市民25人の皆さんと一緒に描きました。「松江樹木めぐり」全6編のマップを手に四季折々の変化を楽しみながら郷土の自然を満喫してほしいと思います。

「松江樹木めぐり」のバックナンバー

- ◆「樹木めぐり」街路樹編
 - *松江樹木めぐり 橋北編 (2010年)
 - *松江樹木めぐり 橋南編 (2011年)
- ◆「樹木めぐり」松江街4ブロック編
 - *松江樹木めぐり 歴史の薫る城山周辺 (2012年)
 - *松江樹木めぐり 人の暮らしが息づく床几山周辺 (2013年)
 - *松江樹木めぐり 古代ロマンを感じる茶臼山周辺 (2014年)
 - *松江樹木めぐり 松江を見守る寝仏さん嵩山周辺 (2015年)



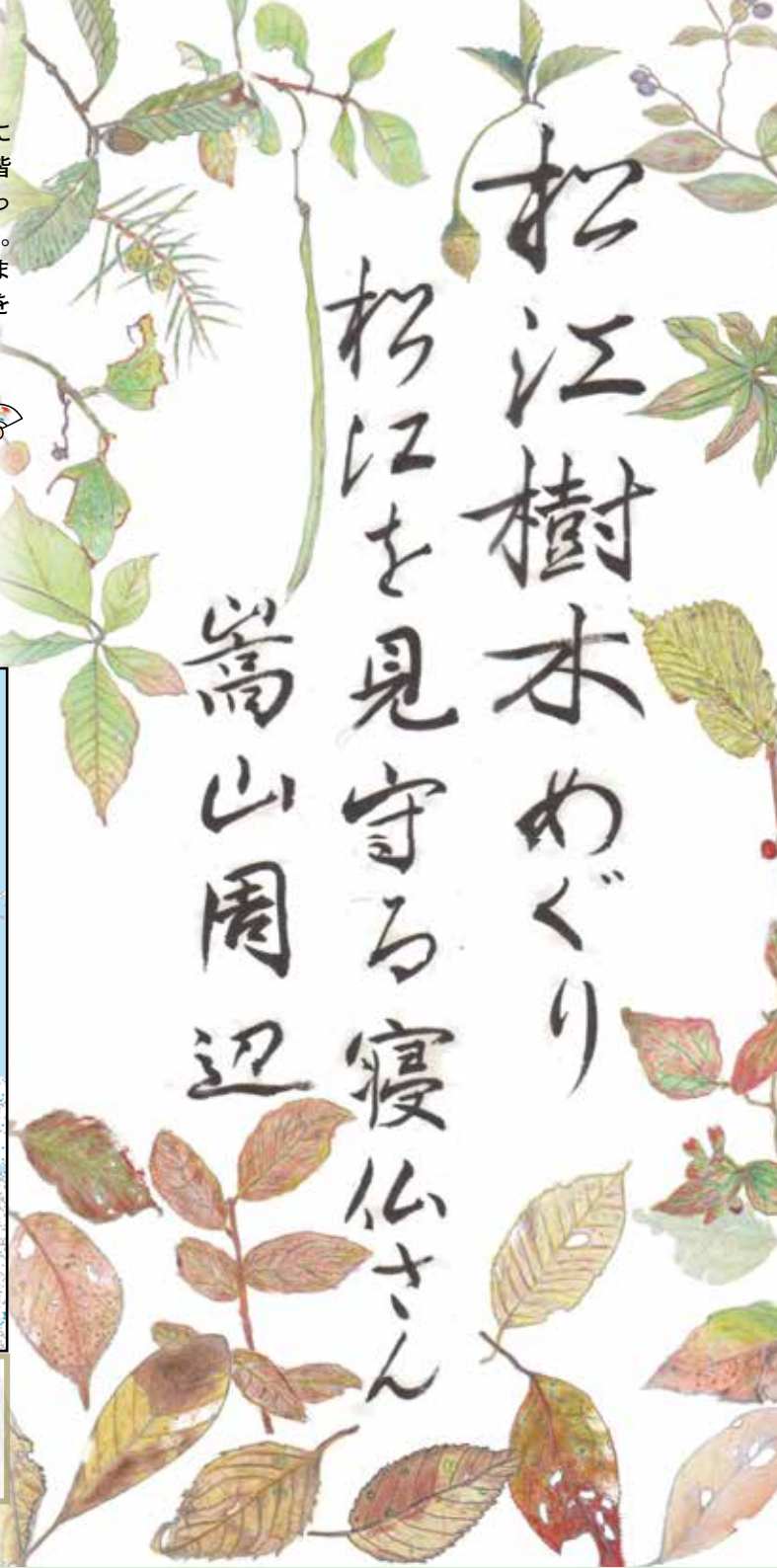
以上の「松江樹木めぐり」は松江市役所公園緑地課で配布しています。



制作：樹木マップ制作委員会

事務局 NPO法人もりふれ倶楽部
 Tel/Fax (0852) 66-3586 URL <http://www.morifure.jp/>
 発行 松江市役所公園緑地課 Tel (0852)55-5369

2015年2月作成



【樹木の解説】

●: 常緑樹 ●: 落葉樹

1 アオキ(ミズキ科)

山地に生える低木。葉は対生し、枝の上部に集まってつく。果実は秋に赤く熟し、翌年5月頃まで残る。雌雄異株。名前の由来は常緑で枝もあおいことによる。押し葉にすると黒くなる。葉の汁は解熱効果がある。



7 クマノミズキ(ミズキ科)

本州~九州に分布する高木。葉は対生する。樹形は、ミズキ属特有の扇形に広がった枝葉が階段状に層をなす。新枝の先に散房花序をつけ、黄白色の小さな花が密集して咲く。名の由来は、熊野地方で発見されたから。



13 ネズミモチ(モクセイ科)

山野に生える小高木。葉は対生し、革質で光沢がある。6月頃本年枝の先に円錐花序を出して、白い花を多数付け、果実は黒紫色に熟す。名の由来は、果実がネズミの糞に、葉がモチノキに似ることによる。



2 アスナロ(ヒノキ科)

日本特産。葉は交互に対生する十字対生。果実は秋に熟す。種子は褐色で両側に広い翼がある。名の由来は「明日はヒノキになろう」からとの説あり。材は建築材、家具等として使われる。境界木として植えられる。



8 クロモジ(クスノキ科)

低山に生える低木。葉や枝には芳香がある。春に黄色の花が咲く。雌雄異株。名の由来は、樹皮の模様が文字のように見えることによる。古くから若枝を削って楊枝をつくる。また、健康酒、化粧品、石鹸にも使われた。



14 ヒサカキ(ツバキ科)

山野に生える小高木。葉は互生し、縁には鈍い鋸歯がある。春、葉腋に小さく白い花をつける。果実は秋~冬に黒紫色に熟す。樹皮は灰褐色。雌雄異株。名の由来は、姫(小さい)サカキの転訛説、非サカキ説など諸説ある。



3 アセビ(ツツジ科)

山地に生える低木。葉は互生し、厚く革質。春に壺形で白い花が多数垂れ下がって咲く。有毒植物。アセビ(馬酔木)の名の由来は、馬が葉を食べると酔ったようになることによる。シカなどはこの木を食べない。



9 ケンボナシ(クロウメモドキ科)

山野に生える高木。葉は基部からのびる3本の葉脈が裏面に突出して目立つ。初夏、枝先に緑白色の花をつける。実は秋に熟し、晩秋から生で食べられる。佐太神社の秋のお祭りには、「佐太名物てんぼ梨」として売られる。



15 ホオノキ(モクレン科)

山地に生える高木。葉は長さ20cm以上で枝先に輪生状に互生する。花は直径17cm位で香りが高く、枝先に1個ずつ上向きにつける。つぼみの先端が北を指すのでコンパスの木と言われる。材はまな板、彫刻材、下駄材に使われる。



4 ウグイスカグラ(スイカズラ科)

山地に生える低木。葉は対生する。春に淡紅色の花を1~2個下垂する。果実は初夏に赤く熟す。樹皮は灰黒色になる。名の由来は、ウグイスが木の茂みに入りはねる姿を「神楽舞」としたことによる説がある。



10 コウヨウザン(スギ科)

高木。葉は細く針状にとがり触ると痛く、裏面には白い気孔帯が2本ある。球果は秋に熟し光沢があり、枯れると枝ごと落ちる。公園や神社、寺に多く植えられている。香りがよく建築材や器具材に利用されている。



16 ムクノキ(ニレ科)

低地や川沿いによくみられる高木。葉の表面には短く硬い毛がある。春に花が咲き、秋に紫黒色に果実が熟す。実は甘く鳥が好む。成長が早く木目は粗い。乾燥した葉は漆器木地、象牙細工の研磨等に利用された。



5 ウラジロガシ(ブナ科)

低地~山地に生える高木。葉は互生し、鋸歯が鋭くとがる。花は穂状で初夏に咲く。名の由来は、葉の裏面が粉白色による。材は建材や家具等に用いられる。葉は、胆石や腎臓結石、切り傷、やけど等に効果がある。



11 シラカシ(ブナ科)

山地に生える高木。葉は互生し、上半分の縁には鋸歯がある。雄花は尾状花序で黄褐色、雌花は数花を上向きにつける。樹皮は裂け目がなくなめらか。名の由来は、材が白いことから。葉は結石の民間薬として服用される。



17 モチノキ(モチノキ科)

海岸近くの山地に生える高木。葉は互生し、長さ4~9cmで革質。葉腋に黄緑色の小さな花を密につける。果実は球形で赤く熟し鳥が良く食べる。雌雄異株。樹皮から染料や鳥もちを作る。これが名の由来となる。



6 カラスザンショウ(ミカン科)

山野に生える小高木。枝に鋭い棘があり、葉は長さ30cmの奇数羽状複葉。夏、枝先に20cmほどの花序をつけ白く小さい花を多数つける。果実は球形で紅紫色。雌雄異株。サンショウ同様、特有の香りがある。



12 ツルシキミ(ミカン科)

積雪地帯に生える低木。ミヤマシキミの変種で、積雪に適応して幹の下部が地を這い、枝はしなり斜上する。葉は互生し茎のやや上部に集まってつく。花期は春で、果実は冬に赤く熟す。葉に有毒物質を含む。雌雄異株。



18 リョウブ(リョウブ科)

山野に生える小高木。夏に穂状の白い花が咲く。木肌はすべすべし、サルスベリに似る。名の由来は、救荒食として律令時代に植樹の令法(りょうぶ)が出たことによる。材はカマ等の柄、杵や床柱に利用される。

